

第四章 内大臣家の物語 雲居雁の養育をめぐる物語

[第一段 内大臣、母大宮の養育を恨む]

二日ばかりありて(そこで二日ばかり置いて)、参りたまへり(大臣は大宮邸にまた伺いなさいました)。しきりに参りたまふ時は(頻繁に大臣が訪問なさる時は)、大宮もいと御心ゆき(大宮はとても上機嫌で)、うれしきものに思いたり(嬉しいこととお思いでした)。御尼額ひきつくろひ(尼削ぎの御髪を整えなさって)、うるはしき御小桂などたてまつり添へて(きれいなお着物で身繕いなさり)、子ながら*恥づかしげにおはする御人ざまなれば(わが子ながら大臣は気が引けるほど立派でいらっしゃるお立場なので)、まほならずぞ見えたてまつりたまふ(仕切り越しにお会いなさいます)。 *「はづかしげ」は客体が<恥づかしそう>という意味の他に、<此方が気が引けるほど相手が立派なさま>と古語辞典にある。

大臣御けしき悪しくて(大臣は御機嫌が悪く)、

「ここにさぶらふもはしたなく(此処にこうしておりますのもきまりが悪く)、人びといかに見はべらむと(女房たちがどう思っているのかと)、心置かれにたり(気になって仕方ありません)。はかばかしき身にはべらねど(私は大した者では御座いませんが)、世にはべらむ限り(生きている限りは)、御目離れず(お側に伺って)御覧ぜられ(お目にかかり)、おぼつかなき隔てなくとこそ思ひたまふれ(様子が分からないような無沙汰が無いようにと心がけています)。

よからぬものうへにて(不心得な娘の事に付いて)、恨めしと思ひきこえさせつべきことの出でまうで来たるを(母上を御恨み申さねば成らない事が出て来てしまいましたものを)、かうも思うたまへじとかつは思ひたまふれど(こうまでは思い申すまいと反面では思い申すものの)、なほ静めがたくおぼえはべりてなむ(やはり抑え難く思えてしまいます)」

と、涙おし拭ひたまふに、宮、化粧じたまへる御顔の色違ひて(きれいに化粧なさったお顔の色を変えて)、御目も大きになりぬ(お目も大きく見開きなさいました)。

「いかやうなることにてか(一体どのようなことで)、今さらの齡の末に(今さらこの老体に)、心置きては思さるらむ(気に障る事があるとお思いなのですか)」

と聞こえたまふも(と申しなさるのにも)、さすがにいとほしけれど(大臣はさすがに同情を覚えたが)、

「頼もしき御蔭に(母上を頼もしい養育者として)、幼き者をたてまつりおきて(幼い娘をお預け申して)、みづからをばなかなか幼くより見たまへもつかず(親の私自身は少しも小さい子を育て申す事も致さず)、まづ目に近きが(ともかく入内した女御が参内すると目に付くので)、交じらひなどはかばかしからぬを(宮仕えに苦勞しているのを)、見たまへ嘆きいとなみつつ(案じて世話しながら)、さりとも人となさせたまひてむと頼みわたりはべりつるに(何とか母上にはこの娘を一人前に育てて頂きたいと頼り通して参りましたのに)、思はずなることのはべりければ(源

氏の若君と通じてしまうなどという、思わぬ事態になってしまいましたので、いと口惜しうなむ(実に残念なのです)。

まことに天の下並ぶ人なき(確かに相手の源氏の若君は天下随一の)有職(いうそく、秀才)にはものせらるめれど(ではいらっしゃるが)、親しきほどにかかるは(親しい縁者同士のこのような婚儀は)、人の聞き思ふところも(世間が知って思うところも)、*あはつけきやうになむ(軽々しいものになって)、何ばかりのほどにもあらぬ仲らひにだにしはべるを(何ほどの身分でもない者の縁組にもある事なので)、かの人の御ためにも(あちらの若君のお為にも)、いとかたはなることなり(相当不都合な事です)。 *「あはつけし」はくうわついた、軽々しい。大臣の言うくうわついた仲とは、慣れ親しんだ者に好意を持って年頃の生理に任せて情交する、ということだろう。そして、それは誰にでも有る事で「何ばかりのほどにもあらぬ仲らひにだにしはべるを」とは、身分の低い者ならそういう仲の結婚で地を固める生き方もいいが、大臣家ほどの家格の者ならそんなことは側女や召人相手に済ませて、結婚は政略を旨としなければならぬ、と大臣は言うのである。政略結婚を、本人の自由意志を無視した親の利己のように言う風潮があるが、それは不利な情勢で敗者に追いやられた場合を誇張したもので、基本的に貴家の子女はそれなりの自覚を持つように育てられるし、本人も選民を使命として生き甲斐を感じたに違いない。確かに権力者には選民の優越感も有っただろうが、身分社会に於いて、とは即ち文明技術の未発達によるエネルギー利用の非効率に因る富や恵の絶対量不足の特に電気利用以前の使役業務が上質な生活に不可欠な事情によって、また反面では其故に使役業務が重視されて多くの且つ意義深い文化や様式美が育まれることにもなったものの、そういう社会構造に成らざるを得ない場合の人間社会に於いては、自己の存在が勢力分布に占める位置を自覚する事が、貴族という実力者たる彼らにとって必ずや充実した生活感をもたらしたに違いないし、実はその感性は有限の世界に生きる以上は今も、そして今後も不滅の一定の人間社会の価値観でもある。簡単に考えれば、当時の藤氏長者は摂政・関白を目指すのが当然であり、源氏は帝から直接する親族としての信任を得て天領の拡大を図らねば成らない。したがって、若君が藤原氏一派となることは中央源氏の独自性の衰退となる。それが大臣の言う「かの人の御ためにも、いとかたはなることなり」ということなのだろう。ただし当時の実際問題としては、藤原氏一般にとって源氏取り込みは一定の勢力拡大であり、源氏にとっても実利獲得による一定の地位保持で有るには違いない。だからこの大臣の認識は、明確に藤氏長者として帝位を補佐する自覚によるものである事を意味する。

*さし離れ(遠い縁者で)、きらきらしうめづらしげあるあたりに(華やかな目を引くほど勢いのある家に)、今めかしうもてなさるこそ(新しく招かれなさってこそ)、をかしけれ(若君にも有意義なのでしょう)。 *注に<内大臣の結婚観。『集成』は「世に時めいていて、今まで縁のなかつた一族に、はなやかな婿扱いをされてこそ、晴れがましいものです。政治家として派閥を拡大したことになる」と注す。>とある。尤もかと思うし、是は今でも女系社会一般に於いて一定の説得力のある婿入りする男の、その人の実力が高く評価されたことを示す誉れである。

*ゆかりむつび(近親で)、*ねぢけがましきさまにて(済し崩しのような結婚だと)、大臣も聞き思ふところはべりなむ(源氏の大員も聞き知ってはお思いになることだろう)。 *「縁睦び」は<近親>と古語辞典にある。確かに、若君の母である故葵の上と姫君の父である内大臣とは同じ大宮腹の兄妹である。従姉弟の中でも特に近親かもしれない。しかし、「ゆかりむつび」は<縁あって慣れ親しんだ>という意味だから、血縁自体の近さよりは幼馴染という育ち方の方を言っているようには見える。それでも、そういう育ち方をするのは結局は近親だからであり、かつ同族と言える同勢力の子女同士だからではあるのだろう。 *「ねぢけがまし」は<

ひねくれている、正常でない>と古語辞典にある。でも、それでは此処の言い換えに成らない。「ねぢく」は<曲がる>だが、「ねぢる」には<強引に進める>の語感がある。で、「ねぢけがまし」を<済し崩し>と意識する。

さるにても(それにしても)、かかることなむと知らせたまひて(こういう次第だと母上がお知らせくださって)、ことさらにもてなし(私が特に計らって)、すこし*ゆかしげあることを*まぜてこそはべらめ(少しは人聞きの良い体裁を付けてこそ然るべきだろう、と存じます)。幼き人びとの心にまかせて御覧じ放ちけるを(幼い本人たちの心に任せてお見捨て置かれたのを)、心憂く思うたまふ(心外に存じます) *「ゆかし」は<知りたい>。「ゆかしげあること」は<いかにも世間が知りたがるような尤もらしい事>。 *「まず」は「混ず(加える)」ともあるが、「交ず(社交する)」もあって、<世間>を受ければ<体裁を付ける>。なお、「こそはべらめ」の係り結びは「とぞ思ひ給ふ」が省略されている、と読んで補語して言い換える。ただ、大臣にこの言葉通りの気持ちは無い、だろう。姫の立后を考えていた大臣には、源氏の若君を特待して他の親族より高位に就けようという考えは、承認は出来ても自身の任としては無い。それは寧ろ源氏大臣の仕事だし、実際に光君は人事に万能なのだから。それだけに、光君が若君に無官の六位から役所勤めを始めたのは、大臣には本当に意外だったに違いないし、そんな平社員と姫との婚儀は余計考えられない、と言う所かも知れない。更に言えば、そういう光君の小賢しさも大臣には気に入らなかった、とさえ深読みできるほどだ。つまり大臣には若君を「ことさらにもてなし、すこしゆかしげあることをまぜ」る心算など無く、従って本心では大宮に「さるにても」などと逃げを用意してやりたくも無く、「幼き人びとの心にまかせて御覧じ放ちけるを心憂く思うたまふ」と正面から不注意を非難したいのである。しかし、さすがに「まほならずぞ見えたてまつりたまふ」齢の末の母君に気を遣って、こうした言い方で婉曲に不満を表明したのである。

など聞こえたまふに(などと申しなさると)、夢にも知りたまはぬことなれば(宮は二人の仲を夢にもご存じない事だったので)、あさましう思して(浅ましくお思いになって)、

「げに(まことに)、かうのたまふもことわりなれど(そなたの仰り様も尤もですが)、かけても(私は少しも)この人びとの下の心なむ知りはべらざりける(この二人の恋心というものには存じておりません)。げに(だというのに)、いと口惜しきことは(何とも悔しいことには)、ここに*こそまして嘆くべくはべれ(二人を育てて来た私こそ誰より悲しくてなりませんのに、)。もろともに罪をおほせたまふは(その私を子供たちと一緒に罪を被せなさるとは)、恨めしきことになむ(恨めしい事です)。 *此処の「こそ~はべれ」の「はべれ」は、見掛けでは係り結びの已然形の語用と同じだが、文意は此処で止まらずに後ろに逆接しているので、敢えて言えば<掛け流し>といったところかも知れないが、つまりは<ど>を補語した場合の普通の已然形の語用で、だから此処の「こそ」も普通に「ここに(私)」を強意している。

見たてまつりしより(お世話致し申してから)、心ことに思ひはべりて(特に可愛く存じまして)、*そこに思しいたらぬことをも(そなたに思い付かぬ細かな事でも)、すぐれたるさまにもてなさむとこそ(最上の事をして差し上げようと)、人知れず思ひはべれ(我ながら心掛けてまいりました)。ものげなきほどを(まだ一人前でも無い内なのを)、心の闇に惑ひて(可愛い者同士だからと目が暗んで)、急ぎものせむとは思ひ寄らぬことになむ(急いで一緒にさせようなどとは考えもしなかった事です)。 *「そこ」は注に<『集成』は「「そこ」は、同等以下の者を呼ぶ二人称」と注す。>とある。しかし、その事は古語辞典にも普通に説明されている。が、分からないのは「思しいたらぬこと」が服装や身だしなみや室礼や小道具類の物事なのか、行事や行儀や読み書きなどの習い事なのか、それらの全てなのか、という文意全体だ。ただ、「まほならずぞ見えたてまつりたまふ」ように大臣を敬っていた大宮が、「そこ」と大臣を息子と

して呼び付けて「いたらぬこと」と難じている事から、激高とまでは行かなくても相当な不満不快でいることを表現している文ではあるのだろう。

さても(それにしても)、誰かはかかることは聞こえけむ(誰が貴方にそのような事を申し上げたのでしょうか)。よからぬ世の人の言につきて(とかく悪口を言う世間の噂を真に受けて)、きはだけく思しのたまふも(殊更猛々しく思いを仰るというのも)、あぢきなく(穏やかでなく)、むなしきことにて(何も無くても騒ぎ立てることで)、人の御名や汚れむ(姫の名前に傷が付いてしまうでしょう)」

とのたまへば(と仰ると、大臣は)、

「何の(何も)、浮きたることにかはべらむ(噂話ではございません)。さぶらふめる人びとも(近くに控えているであろう姫付きの女房たちも)、かつは皆もどき笑ふべかめるものを(陰では皆悪口を言って笑っているだろうものを)、いと口惜しく(非常に失望し)、やすからず思うたまへらるや(腹立たしく思えてなりません)」

とて(と言って)、立ちたまひぬ(姫君のお部屋の方へ向かわれました)。

心知れるどちは(事情を知っている女房同士は)、いみじういとほしく思ふ(大変に困った事だと思えます)。一夜の*しりう言の人びとは(特に先日の夜に陰口を利いていた女房たちは)、まして心地も違ひて(いっそう気が滅入って)、「何にかかる睦物語をしけむ(どうしてあんな内緒話をしてしまったのだろう)」と、思ひ嘆きあへり(悲嘆し合っていました)。 *「しりうごと」は「後言」で<悪口、陰口>、と古語辞典にある。

[第二段 内大臣、乳母らを非難する]

姫君は(姫君はお部屋で)、何心もなくしておはするに(父君がお越しになった用向きをご存じなくしていらっしゃって)、さしのぞきたまへれば(大臣は姫の表情をご覧になると)、いとらうたげなる御さまを(とても幼く見えるお姿を)、あはれに見たてまつりたまふ(可愛らしいとお思い申しなさいます)。

「若き人といひながら(いくら未熟な二人と言っても)、心幼くものしたまひけるを知らで(思慮も無く深い仲に成っていらっしゃったのを知らないで)、いとかく人なみなみに思ひける我こそ(正に弘徽殿女御と同じように当家の正統な娘として入内させる事を考えていた私こそ)、まさりてはかなかりけれ(若い者以上に頼り無かった訳だ)」

とて(と大臣は)、御乳母どもをさいなみたまふに(乳母たちを苛みなされば)、聞こえむ方なし(誰も何もお答え申しようもありません)。

「かやうのことは、限りなき帝の(畏れ多くも帝の)*御齋女も(おんいつきむすめ、内親王の齋宮にも)、おのづから過つ例(中には禁を犯した例が)、昔物語にもあめれど(昔話にも有るようですが)、けしきを知り伝ふる人(その例では二人の気持ちを知って手引きをする女房が)、さるべ

き隙にてこそあらめ(然るべく隙を窺ってこそ出来たのでしょ) *「齋女」はくいつくしんだむすめ>の語感だとすれば<大事に育てた王女>の意味のようだが、姫御子は普通でも大事に育てられるし、藤原家の女房たちが自己弁護の意図から王族の醜聞を被せるには「齋宮、齋院」の方が効果的だろう。で、「あやまつためし」は話の運びからして<禁を犯して情交した事例>を意味するから、今に伝わる事例の「小柴垣草子」を類推すれば良さそうだ。「小柴垣草子」は福田和彦氏の著書「春画 浮世絵の魅惑Ⅰ」(ベスト新書)によれば、<10世紀末の寛和二年(かんなにねん、986年)六月に実際に起きた済子内親王(なりこひめみこ、齋宮いつきのみや・花山かざん天皇の息女)が野宮(ののみや、京都賀茂神社にある伊勢神宮の齋宮の仮宮)において警護の武士・平致光(たいらのむねみつ)と密通した一大醜聞を主題にした絵詞である。>とある。ただし、野宮神社のホームページにある由來說明には<嵯峨野の清らかな場所を選んで建てられた野宮は、黒木鳥居と小柴垣に囲まれた聖地でした。その様子は源氏物語「賢木の巻」に美しく描写されています。野宮の場所は天皇の御即位毎に定められ、当社の場所が使用されたのは平安時代のはじめ嵯峨天皇皇女仁子内親王が最初とされています。>とあり、正面写真に黒木鳥居と小柴垣が示されていて、併せて「小柴垣」という絵詞の名の由来まで分かった気になる。なお、花山天皇はこの失態で引責出家したのか僅か二年で退位しているが、年表には<藤原兼家の策謀で花山天皇出家、一条天皇即位>とあり、995年には遂に兼家の子である道長が一条天皇の補佐に就き、やがて式部をしてこの物語を編み出させるに至る、という生々しさではある。

「これは(このお二人の場合は)、明け暮れ立ちまじりたまひて年ごろおはしましつるを(始終一緒に遊んで長年過ごしていらしたのを)、何かは(どうして)、いはけなき御ほどを(無邪気なお二人の仲を)、宮の御もてなしよりさし過ぐしても(宮様がお許しになっているのを差し置いてまで)、隔てきこえさせむと(離れさせ申せましょうかと)、うちとけて過ぐしきこえつるを(そのまま穏やかに過ごしてまいりましたが)、一昨年(をととし)ばかりよりは(ぐらいからは)、けぎやかなる御もてなしになりにてはべるめるに(殿の御言いつけではっきりと別々のお暮らしになっていた次第のはずなのに)、*若き人とても(成人式前といっても人によっては)、うち紛ればみ(人目を紛らわせて)、いかにぞや(困った事に)、世づきたる人もおはすべかめるを(男女の縁を結んでしまう者も居るようですが)、夢に乱れたるところおはしまさざめれば(若君は情欲の夢に任せて狼藉に及ぶような気配がお見受け出来ませんでしたので)、さらに思ひ寄らざりけること(私たち女房は少しもこうした事になることは考え付かずにおりましたものね)」 *「わかきひと」については、注に<『完訳』は「以下、一般の若者。色恋ごとに傾く者もあるとして、「ゆめに乱れたる」以下の夕霧と対比」と注す。>とある。ざっと<元服や着裳などの成人式を挙げる前の人>のことなのだろう。大臣が言った「若き人」を受けた女房の言い返し、という注記かと思う。ただ親切な説明に感謝しつつも繰言だが、いくら注釈とは言え此処の時点での「夕霧」の呼称には違和感を禁じえないし、何とも不快だ。一般注釈は一般読者に対する解説や案内として研究者が部外へ広く知見を紹介する手段の筈で、一般読者にいきなり部会を覗かせるような態度は研究者が自らの立場についての社会的責務感を欠く自己客観視の訓練不足を窺わせて、幼愚社会の未熟ささえ覚えさせられる。仮に「夕霧」の表記が必要なら、せめて「若君(後の夕霧)」のように表記すべきだが、敢えて書いてみた括弧内表記も今の時点では本文読解に全く不要だ。

と、おのがどち嘆く(女房自身同士で嘆きます)。

「よし、しばし、かかること漏らさじ(この事は他言するな)。隠れあるまじきことなれど(隠し切れない事だが)、心をやりて(せいぜい努めて)、あらぬこととだに言ひなされよ(根も葉もな

い噂だと言ひ張りなさい)。今かしこに渡したてまつりてむ(今後は姫を向こうの自邸に引き取って御育て申す)。*宮の御心のいとつらきなり(母宮の不注意が残念でならぬ)。そこたちは(そなたたちは)、さりともしも(いくらなんでも)、いとかかれとしも(こうなれば良いなどは)、思はれざりけむ(思っていなかったのだから)」 *大臣は大宮に対しては、女房たちへの監督不行き届きを非難はしたが、責任追及の言い方としては自分の配慮が至らなかった、と飲み込んだ。そして女房たちに対しては、陰口をたしなめはしたが、責任追及の言い方としては総責任者の大宮に罪を負わせた。人を動かして自分の力とする社長の人心懐柔策である。また実際に、今は事態の鎮静化を図る他に手立てが無かつたろう。

とのたまへば(と殿が仰ると)、「*いとほしきなかにも(不本意だろうに)、うれしくのたまふ(有難く仰る、殿のお言葉です)」と思ひて(と女房たちは思って)、 *此処の「いとほし」は<かわいそう>とか<気の毒>とかでは無い。そんな事を言っている場合では無いのだから。そこで、「いとほし」を<厭ひ+がまし>だと解釈してみる。と、「厭ふ(いとふ)」は<嫌悪する>が原義で<困難を気遣う>は派生のようだから、「いとほし」は<厭になる>か<困る>あたりだろう。では、誰が何を<厭になっている>のかと言えば、「なかにも(なのに)」「のたまふ(仰る)」とあるから、大臣が姫の入内に困難が生じた事を<実に心外に思いなされた>のである。文法上の分かり難さの整理を試みれば、女房の心中文なので<いとほしく思ひ給ふめる>ぐらいの敬語文を「いとほしき」で簡略し、「のたまふ」の後の<殿の御言なりや>くらいを省略したのだから。因みに、女房が自分たちの立場の無さを<困った>のなら、「なかにも」ではなく「いとほしくも」が良い筈だ。ただ、「うれしく」は女房たちの気持ちで<有難く>を意味する。というのは、この場面で大臣が何一つと「うれしく」思う筈も無いが、もし大臣の気持ちなら、いくら女房たちの心中文でも他者事に<(うれしく)思し>は付くだろうから。

「あな(それはもう)、*いみじや(本当に困ったことです)。*大納言殿に聞きたまはむことをさへ思ひはべれば(御母方の大納言家がお知りになることまで考えますと)、めでたきにても(若君がいくら優れた人であっても)、*ただ人の筋は(王家で無い人は)、何のめづらしさにか思ひたまへかけむ(どうして姫のお相手に相応しいなどと思ひ申せましようか)」 *「いみじ」は程度を表しくはなはなだしと古語辞典にある。何の程度かと言えば二人の仲であり、どのような程度なのかと言えば大臣に追従して遺憾に思う強さである。で、女房たちは<本当に困った事>と言う他は無い。 *「大納言殿」は注に<雲居雁の母が再婚した按察使大納言をさす。>とある。「雲居雁」って誰なんだ、って姫君以外には該当者無しだが、読み手の邪魔をする無神経な注だ。ともあれ、按察使大納言は名誉職だが、女房たちがこういう言い方をする所を見れば、もしかするとこの大納言殿は王家筋なのかもしれない。とはいえ実権は藤原氏に有るので、女房たちのこの言い回しの意図は本気で大納言殿の家格に敬意を表しているのではなく、殿の前で自分たちが事情をよく承知していることの弁明に御母方を持ち出したに過ぎない。だったら、なおさら注意を怠るなど言いたい所だが、責任は全権の大宮に有る、ということになっている。 *「ただうど」は今の若君のことなら<無官>の意味にも取れるが、「すぢ」とあるので<帝の臣下に列する者、王族ではない者>を意味する。確かに「源氏」姓は<元王族>の意を表す。

と聞こゆ(と申し上げます)。

姫君は、いと幼げなる御さまにて(とても幼げな可愛らしいお姿で)、よろづに申したまへども(いろいろとご注意申しなさっても)、かひあるべきにもあらねば(意味が分かる様子も無いので)、うち泣きたまひて(大臣は思わず涙ぐみなさって)、

「いかにしてか(どのようにして)、いたづらになりたまふまじきわざはすべからむ(姫に瑕が付きなさない様な手立てを講じたものか)」

と、忍びてさるべきどちのたまひて(密かに主だった女房たちと相談なさって)、大宮をのみぞ恨みきこえたまふ(大宮ばかりを非難申しなさいます)。

[第三段 大宮、内大臣を恨む]

宮は、いといとほしと思すなかにも(とても愛らしいとお思いになるお二人の中でも)、男君の御*かなしさはすぐれたまふにやあらむ(若君への御可愛さが勝っているのであろうか)、かかる心のありけるも(若君が男として姫君を女と思うのも)、うつくしう思さるるに(好ましくお思いになられたのに)、情けなく(大臣が子供たちへの思い遣りも無く)、*こよなきことのやうに思しのためへるを(とんでもない事のように思い仰ったのを)、 *「かなし」は「愛し」でくしみじみといとしい>とある。なお、「いとほし」も「かなし」も「うつくし」も「愛し」と漢字表記できるようだが、その違いが実感できるかどうかは個人の感性のような気がする。私には分かるような、分からないような、余り良くは分からない。大宮は二人とも手元で育てたのだから、その意味では二人とも「内孫」だろうが、娘腹の若君と嫁腹の姫君では、やはり若君が「内孫」で姫君は「外孫」なのだろう。で、そんな言い換えになった。 *「こよなし」はく(良くも悪くも)程度がこの上ない>とある。

「などかさしもあるべき(なぜそうあるべきだと言うのか)。もとよりいたう思ひつきたまふことなく(大臣は元々この娘の将来を深くお考えになる事も無くて)、かくまでかしづかむとも思し立たざりしを(こうまで大事にお世話を申し上げようとも思い立っていらっしやらなかったのを)、わがかくもてなしそめたればこそ(私がこのように育て上げたればこそ)、春宮の御ことも思しかけためれ(東宮への入内も思い始めなされたに違いない)。*とりはづして(その思惑が外れて)、ただ人の宿世あらば(姫が王族以外の人と結ばれる運命であるならば)、この君よりほかにまさるべき人やはある(この若君以上の人があるだろうか)。容貌(顔立ちや)、ありさまよりはじめて(立ち振る舞いをはじめとして)、等しき人のあるべきかは(他に匹敵する人が居るもののだろうか、)。*これより及びなからむ際にもとこそ思へ(この姫君でさえ及ばぬ身分の相手でも似合いと思えるほどの若君なのに)」 *「取り外す」はく取り損なう、失敗する>。 *「これより」は注に<『集成』は「雲居雁以上の、及びもつかぬような身分の方にでもふさわしいと思うのに。夕霧は内親王の婿にでもふさわしいと、大宮は思う」と注す。>とある。

と、*わが心ざしのまさればにや(御自分の思い遣りの方が深いという事でしょうか)、大臣を恨めしう思ひきこえたまふ(大臣を非難めいて思い申しなさいます)。御心のうちを見せたてまつりたらば(この大宮の御考えをお知りになったら)、ましていかに恨みきこえたまはむ(大臣は更にいっそうどれほど宮を非難申し上げなされる事やら)。 *この大宮の考え方は一見すると現代的のようだが、実は王家育ちの大様である。宮は故桐壺帝の妹宮であったのを、時の左大臣家藤原氏に降嫁したのである。その事は宮にとって、宮家も身内、藤原氏も身内、という文化と様式の繁栄構造としてしか意味しなかった。権威と権限の実力勝負による折り合いという表向きの政治的意味に関与する立場に無かったのである。自分の血筋が、ただ人には願っても叶わない高貴なものである自覚が、理屈としてはともかく実感としては持ち得ないのだろう。王族でも、男なら何らかの対外交渉に携わる内に、他者を鏡として自分の身分を思い知る事も有るだろうが、内親

王にはその機会も乏しいし、担う役割も違う。片や我が子とは言え、大臣は藤原一族を率いる立場である。両者の感性は共有し合えない。と、堅苦しく言わない所がこの女語りの味わいなのかも。

[第四段 大宮、夕霧に忠告]

かく騒がるらむとも知らで(このように自分の事が騒がれているとも知らずに)、冠者の君参りたまへり(学生の若君が大宮邸に遣って来なさいました)。一夜も(ひとよも、先日の夜も)人目しげうて(人目が多くて)、思ふことをもえ聞こえずなりにしかば(思うように姫とお話し出来ずになってしまったので)、常よりもあはれにおぼえたまひければ(いつもよりも恋しくお思いにお成りだったので)、夕つ方おはしたるなるべし(二日後のこの夕方になってたまらずにお見えになったようです)。

宮、例は是非知らず(いつもは何はともあれ)、うち笑みて待ちよろこびきこえたまふを(笑顔で喜んで若君をお迎え申しなさいますのに)、まめだちて物語など聞こえたまふついでに(この日はまじめなお顔でお話しなさる事には)、

「御ことにより(貴方の事で)、内大臣(うちのおとど)の怨じてものしたまひにしかば(が機嫌を悪くなさって御出で)、いとなむいとほしき(大変な難儀です)。ゆかしげなきことをしも思ひそめたまひて(あの人必ずしも好ましからざる事を貴方がお考え始めなさって)、人にも思はせたまひつべきが心苦しきこと(あの人を悩ませなさる事になってしまったのが残念です)。かうも聞こえじと思へど(こんな事は申し上げまいとも思いますが)、さる心も知りたまはでやと思へばなむ(こうした事情をお知りなっていらっしゃらなくてはとも思いお話し申しました)」

と聞こえたまへば(と申しなさると)、心にかかれることの筋なれば(若君には心当たりの有る事なので)、ふと思ひ寄りぬ(すぐに何の話かお分かりになりました)。面赤みて(おもてあかみて、そして顔を赤くして)、

「何ごとにかはべらむ(何の事でしょうか)。静かなる所に籠もりはべりにしのち(勉強部屋に閉じ入もってからは)、ともかくも人に交じる折なければ(何しろ人に会う機会もないので)、恨みたまふべきことはべらじとなむ思ひたまふる(叔父上が非難なさるようなことは無いものと存じます)」

とて(と言って)、いと恥づかしと思へるけしきを(とても恥づかしそうに見える様子を)、あはれに心苦しうて(宮は何とも可哀想になって)、

「よし(まあいいでしょう)。今よりだに用意したまへ(これからは気を付けなさい)」

とばかりにて(とだけ言って)、異事に言ひなしたまうつ(他の事に話を移しなさいました)。